



祭りと社会変動：熊本市「ボシタ祭り」をめぐって (特集 日本人と日本文化)

芦田，徹郎

(Citation)

社会学雑誌, 5:52-72

(Issue Date)

1988-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010759>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010759>



祭りと社会変動

——熊本市「ボシタ祭り」をめぐる——

芦 田 徹 郎

はじめに

大きな祭りから小さな祭りまで、全国的に祭りが盛んだという。都市の祭りの研究を長年手がけている松平誠は、「祭は、こうして再び都市に蘇ってきた。つい二十年前には、大昔の埃、カビの塊のように見捨てられていたのが、嘘のようである」（『祭の文化』、一頁）と感慨をもらしている。熊本県人吉・球磨地方の各地区でここの二・二年のあいだに相次いで復活した臼太鼓踊りを取材した地元紙の記者は、「不思議なことに『三十年ぶりの復活』と言う言葉が同じように返ってくる」と首をかしげている。（熊日 S・62・11・26・夕 斜断記¹）

二〇年といひ三〇年といつても大した違いはない。要するに、しばらく沈滞していた「お祭り」がここ数年のあいだに

盛んになってきたということである。これはどういうことなのであろうか。

上野千鶴子は、「祭りの社会学的研究は、デュルケムの『祭りとは共同体のコミュニケーション（神人交流）である』という一言に尽くされており、この射程を超える見方はまだ現われていない」（「祭りと共同体」、四六―七頁）という。さらに彼女は、「デュルケムが祭りを『コミュニケーションを通しての集団の再統合』と定式化し、神とは（共同体の）集合力のことであり、共同体は神への崇拜を通して自身を崇拜しているのだ」と述べた後では、祭りについて言うべきことは、ほとんど残っていない」（同、五〇頁）ともつけ加えている。

実際にも、祭り研究の多くが祭りとそれが「再統合する」共同体との関係をめぐって展開されているようである。祭りを共同体の社会組織や生活文化のなかに位置づけるか、

あるいは逆に、前者の祭礼組織やシンボリズムを通して後者の隠された構造を明らかにしようとするか、の違いはあったものである。

私たちも、祭りとは「共同体のコミュニケーション」、別の表現を借りれば「集合的沸騰」というデュルケムの考え方を、基本的には承認する。しかし、本稿の主たる目的は、祭りとその祭りが「再統合」する共同体との関係、言い換えれば、祭りを通しての共同体の自己確認のメカニズムを探ることにあるのではない。そうした祭り研究は、祭りとその祭りにとつてのいわば「内部」環境（としての共同体）との係わりに注目している。

それに対して本稿の焦点は、祭りとその内部環境との関係にも目くばりしつつ、主として、祭りとその祭りにとつてのいわば「外部」環境（としての共同体？）との関連に据えられている。というのは、本稿の目的は、なぜ今日、日本各地で多種多様な祭りがいっせいに盛んになってきたのか、あるいは、なぜこれほどにも祭りが求められているのか、その一端を説明することにあるからである。

それぞれの祭りにとつてのそれぞれの内部環境（共同体）は多様であろう。それにもかかわらず、現在の祭りの一般的な盛況は、多様な共同体と多様な祭りが同一の外部環境のもとにおかれていることを示唆しているように思える。

こうしたテーマを設定したにもかかわらず、私たちは多

くの祭りの事例研究やそれらの比較研究ではなく、この課題の解明にとつて最も好都合と思われる一つの事例―熊本市の「ボシタ祭り」―のみを取り上げている。この方法もデュルケムがその宗教社会学を展開した先例にならった。しかしながら、議論を進めるにあたって常に私たちの念頭にあったのは、彼のトートミズム研究ではなく、彼が自殺現象を扱った方法である。

本稿では、まずボシタ祭りの概要を紹介した後で、一般の参加者（団体）に焦点を当てて、この祭りの戦後のきわめてドラスティックな変移の後をたどる。ついで、戦前・戦後を通じてのこの祭りの変容とマクロな社会変動との関連を探る。これらの検討の過程で、現在の日本の祭りブームの背後にあるより大きな時代の性格の一端が明らかになるであろう。結論的にいえば、現在の祭りブームは、地域おこしや、コミュニティの形成や、ふるさとづくりに貢献するものとして、歓迎してばかりはおれないということである。

一 ボシタ祭りの概要

「ボシタ祭り」とは、熊本市の藤崎八幡宮の秋の例大祭の通称である。藤崎宮は、承平五年（九三五）に石清水八幡宮の分霊を勧請したものと伝えられている。「八幡」で

はなく「八幡」と書くのは、後奈良天皇下賜の勅額に拠るとい
うが、他の八幡宮と特に性格が異なるわけではない。明治
一〇年の西南の役の戦禍で藤崎台（熊本城付近）にあった
社殿が荒廃した後、現在地である同市井川淵町に移った。
旧社格は、まず県社、後に国幣小社に昇格している。祭神
は、主神が八幡大神（応神天皇）であり、相殿神として住
吉大神と神功皇后を祭る。主神の僧形八幡像は、国の重
要文化財に指定されている。

肥後一の宮は元官幣大社の阿蘇神社である。しかし、実
質的には、藤崎宮が肥後一の宮的な存在になっている。現
在も多くの市民の崇敬を集め、正月三カ日の参拝者は県下
で最も多い。

もともとは放生会に由来するといわれている同宮の例大
祭は、現在では熊本県下最大の祭礼になっている。例年九
月一日から同一五日までのあいだに、様々な行事が催さ
れるが、最終日の神幸（しんこう）式でクライマックスを
迎える。神幸式は、早朝に三柱の祭神が御旅所に向けて社
殿を出る朝の神幸と、夕刻本殿に戻る午後の神幸からなる。
神幸の行列は、「前駆」（せんく）とよばれる騎馬の神官を
先頭に、藤崎宮の三柱の祭神が乗る「一の宮」、「二の宮」、
「三の宮」と称される牛車（元来は神輿で人が昇っていた
が、現在ではそれを牛が引いている）、それに神馬、神具
が続き、さらにその後に「随兵」（ずいびょう）とよばれる

武者、獅子舞、町鉾、みこし（町御輿）、神官、「飾馬」（かざ
りうま）とよばれる飾りつけをした馬の行列がねり歩く。
このうち「随兵」と「飾馬」とがこの祭りに独特の景観を
あたえている。

随兵の行列は、加藤清正が文禄・慶長の役の朝鮮出兵より
帰国したさい、朝鮮在陣中の藤崎宮の加護に感謝して自ら兵
を率いて神幸式に供奉したのがおこりと伝えられている。加藤
家の後を襲った細川藩政時代にも受け継がれ、廃藩置県を
経てなお現在に至っている。行列は、徒歩で従う甲冑武者
五〇人と槍を持った長柄士（ながえし）五〇人、それを指
揮する乗馬の随兵頭、長柄頭、神幸奉行各一名からなり、
祭りの一威観となっている。随兵といえは神幸行列全体を
指すこともあり、一般に午前の神幸行列は「朝随兵」、午後
のそれは「夕随兵」とよびならわされている。

現在、前駆から随兵までを藤崎宮が準備し、神官の随行
は別にして、獅子舞以下が一般市民（必ずしも氏子ではな
い）による奉納である。一般市民の奉納のうち、とりわけ
この祭りをきわだたせているのが飾馬である。独特の飾り
を背につけた数十頭の馬を、ラッパ・太鼓・カネのまこと
に賑やかな音に合わせて、手にまとい・ひしゃく・ちょう
ちん・花傘などをもった二万人近いハッピー姿の男女の「勢
子」（せこ）が「ボシタ、ボシタ」とこれまた独特の掛け声
で囃したて、踊りながら追っていく。現在、二十数万人と

も、三十万人以上とも言われる祭りの見物客にとつての一番の関心はこの飾馬にある。神幸行列を指して「馬追い」とよぶこともあり、また、神幸式全体を指して「ボシタ祭り」とよぶのが今日では通例である。神幸順路にあたる市の中心部は、こうして一日中喧騒に包まれるのである。

ボシタ祭りが社会学的関心を呼びおこす契機はいくつも指摘することができるが、そのうちの一つに、この祭りがその時々時代の特性を敏感に反映することがある。それなりに古い歴史をもった伝統的な祭りではあるものの、藩政時代には家臣団による奉仕であつたものが廃藩置県後に町方の手に移つてからは、整つた、もしくは堅い祭礼組織が存在しない。そのため、たとえば飾馬の奉納者の数や性格は、時流の影響を受けやすい。少なくとも数年前までは、飾馬の奉納にはあまり厳格な資格や条件が要求されなかつた。また逆に、奉納の取り止めも自由である。そのため戦後に限つても、飾馬の奉納者（団体）の数とその性格には大きな変化がみられるのである。

戦後数年は四〇〜五〇頭の飾馬の奉納が記録されているが、日本経済の高度成長とは裏腹にやがて漸減し、昭和三〇年代後半から四〇年代にかけてはわずかに数頭の年が続く。しかし、高度成長の終焉とともに奉納頭数は再び増え始め、ここ数年はおよそ五〇頭と旧に復している。しかも、近年の祭りの隆盛は、単に奉納頭数の復興にとどまらず、一頭

あたりの勢子の数が激増しているのである。終戦直後には、一頭あたりの勢子がせいぜい数十人であつた。ところが近年では、それが数百人にもなり、そのため神幸行列全体の勢子総数は二万人近くになって、円滑な神幸ができるか懸念されるほどである。そのため、奉納希望者を原則としてすべて受け入れる従来の方針が変更され、昭和五七ごろからは、新規の奉納に対してかなり厳しい制限を加えている。また、一頭あたりの勢子の数にも制限をもうけている。

飾馬の奉納頭数や勢子の規模だけではなく、奉納者（団体）の性格にも大きな変化がみられる。かつては各地域の有志による奉納が主流を占めていたようであるが、昭和五〇年ごろからの復興にあたって大きな役割を果たしたのは、企業と高校同窓会を基盤とする団体であつた。また、近年では母体となる特定の集団をもたず、祭りに参加することそれ自体を目的に結成された、「祭り愛好団体」とでもいふべきものが一大勢力になっている。かくして、現在では飾馬の奉納団体を、「地域」・「企業」・「高校同窓団体」・「祭り愛好団体」の四グループに大別することができるのである。

ところが、それぞれの奉納団体の成員資格がこれまた厳格でないため、市民は一般に複数の、場合によってはどのグループの団体への参加も可能になり、年によって異なる団体から祭りに出ることもできる。それゆえ、かなりの数の

「祭り好き」は、好みにあった奉納団体を求めて浮動するのである。このなかで成員資格についてもっとも厳格なのがゲゼルシャフトの典型であるはずの近代型企业団体であるのは、皮肉である。ただし、今回はこの問題について十分に論じることではない。

二 戦後の飾馬の奉納

〈戦後の祭りの復活〉

昭和二〇年、熊本市は二度にわたる空襲で市街地の三分の一を焼失している。敗戦直後の例大祭では神幸式が中止され、簡素な式典のみが執行された。しかし、翌二十一年には、軍国主義的色彩を嫌ってか「随兵」が廃止されたものの（二五年に復活）、神幸式自体は早くも復活している。当時の新聞記事によれば、一七頭ほどが奉納されたようである（正確な奉納頭数は藤崎宮にも資料が残っておらず不詳である）。一七頭という数は、戦中の奉納頭数と比べるとかなり多い。ちなみに、昭和十五年から一九年までは、それぞれ七頭、六頭、一〇頭、一一頭、六頭であり、この五年間の平均奉納頭数は八頭であった。

翌二十二年には一躍四〇頭が奉納され、二十三年には五七頭にも達している。二十四年は四一頭に落ちるものの、その後二七年までは四〇頭前後で安定した年が続く。敗戦後数年

にして、戦後のボシタ祭りは第一次のピークを迎えた。

当時の飾馬奉納団体の性格については不詳であるが、町名をつけたものが多い。二二年の参加団体名簿を見ても、全四〇団体のうち町名のつかないものは、わずか二団体に過ぎず、同じ町名の団体が重複して出ていたりする。おそらくその多くは、戦前と同様に地域の奉納と個人の奉納とが混合したものであろう。

〈飾馬の減少〉

昭和二八年の飾馬は二九頭であり、前年・前々年と安定していた頭数からみればかなり大幅な減少である。これは、この年の六月二六日に、熊本県下に死者五三七人、重軽傷者一千五〇〇人以上の甚大な被害をもたらした、いわゆる「六・二六水害」の影響と考えるのが妥当であろう。

きっかけはともかく、昭和二八年に急落した飾馬の奉納は、その後もほぼ一貫して減少を続け、ついに三七年には九頭となって、戦後初めての一桁台を記録した。

当時の関係者は、飾馬減少の原因として第一に経済的な問題をあげている。昭和三七年の一世帯ひと月あたりの実収入（税込み）が全国平均で五万八一七円（『朝日年鑑』一九六四年版）であるときに、飾馬の奉納に必要な経費は最低二・三〇万円であった。（S・37・9・14「飾り馬」はどうして減る）地元の新聞には「よほどの人でなければ、

毎年奉納はできまい」(S・34・9・12・朝 読者)という声が寄せられている。

またこの頃には、すでに近郊の農家で馬を飼うところが少なくなっており、かつてのように農家から借りることができず、馬の調達が難しくなっている。したがって、馬の借り賃も高くなり(当時で三〜五万円)、それだけ奉納費用もかさむ。藤崎宮でさえ神馬などをそろえるのに苦労したという。(S・37・9・14・夕「飾り馬」はどうして減る)

そのうえ、地域的なつながりが希薄になり、神を崇拝する気持も薄れてきている社会では、市民の意識も変化してきたという見解がある。したがって、かつての隆盛を取り戻すためには、宗教的行事にとられない「現代的意味」を祭りに持たせなくてはならないという識者もいる。(S・36・9・10・朝「お祭り」に思う)

また、当時は飾馬奉納団体による寄付金の収集が強要的であるという批判が市民のあいだで大きくなっていた。こうした問題(寄付の強要や寄付への拒否反応)についての識者の意見も、信仰心の篤かった時代には起こりえないというものである。(S・36・9・10・朝「お祭り」に思う、S・37・9・14・夕「飾り馬」はどうして減る)

さらには、前述の六・二六水害以来「災害復旧工事に働く土工の転入で」(S・29・9・10・夕)活発化した暴力団の祭り参加が、他の団体の祭りへの意欲を失わせたという宮司

の回想もある。(S・46・7・20・朝)。昭和三十九年ごろには、これが「土建暴力」という形で問題になった際には、むしろ、この摘発によって奉納が減少した。土建暴力の摘発は四〇年に本格化し四一年に終息するが、飾馬の奉納頭数は、三十九年と四一年には戦後最少の五頭にまで落ち込み、四〇年も六頭とふるわない。

〈祭りの低迷〉

昭和四〇年からは、現在も奉納している建吉(たてよし)組が参加している。建吉組は藤崎宮の社殿修理を引き受けるなど、藤崎宮と縁故のある建設会社である。四〇年の初参加にあたっては、衰微する祭りを危惧する藤崎宮から奉納の要請があったという。

それにもかかわらず、四一年の飾馬は五頭で、三十九年につづき二度目の戦後最少を記録した。しかもこの年は、二頭を奉納した建吉組を二団体として扱っており、実質的には四団体で文字どおりの戦後最少であった。他の奉納団体は鳥居基(とりいもと)・水道町親和会・春竹町である。

「鳥居基」とは、「藤崎宮のお膝元」といった意味で、藤崎宮が所在する碩台小学校区の住民が主体となっている団体である。水道町も藤崎宮に近接する地区で準「鳥居基」的な扱いを受けている。これらはいわば「身内」であって、最後の「とりで」でもある。また、春竹町も昔から飾馬を

よく出している地域である。ボシタ祭りは戦後最大の危機に直面していた。

この危機の時期において、従来とは異なる動きがみられる。昭和四三年には、今では恒例になっている鶴屋のみこしが初めて奉納された。飾馬の奉納ではなかったが、熊本を代表するデパートのひとつである鶴屋の参加は、近代型企业がこの祭りに組織的に参加した最初の例である。また、この年には一一頭の飾馬が奉納されているが、そのなかに市役所職員有志が含まれているのが注目される。沈滞している祭りを盛りたてて、市職員と市民とのつながりを深めようというのである。もちろん、私費による奉納である。馬の作りものやバンド演奏に合わせたの行列など、それまでに見られないカラーを出している。

さらに、四四年には九州産交が、藤崎宮とは特に縁故のない近代型企业としては初めて飾馬を奉納している。九州産交は、県内では随一、九州でも屈指のバス会社である。翌四五年には「電電九州」（日本電信電話公社九州電気通信局）がこれに加わる。いずれも、市役所有志と同様にパレード色が強かったようである。

四七年には熊本青年会議所が参加している。関係者は、「低迷する郷土の祭りの活性化のために」参加したと、私たちに語っている。五九年には、その目的は達成されたとして飾馬の奉納をやめた。田村紀雄によれば、近年の「新しい

祭りにはたいいてい青年会議所がからんでいる」（「祭りの社会学」、二七頁）ということである。熊本県の他市の場合でも同様の傾向がみられる。

暴力団の参加、寄付の強要、馬の虐待、下品な衣装や卑猥な振る舞いなど、従来とかく批判のあったボシタ祭りであるが、祭りの低迷はかえって意図せざる「浄化」をもたらしたようである。ちなみに、昭和四六年の飾馬奉納団体は、鳥居基・水道町親和会・下通繁栄会・電電九州奉賛会・九州産交の五団体である。四七年はそこに青年会議所が加わって六団体、四八年は青年会議所がいったん奉納を取り止めたが、本荘町子供会が加わっている。藤崎宮の「お膝元」である鳥居基と水道町親和会を別にすれば、熊本市きつての商店街、公共企業体、バス会社、公益法人、子供会と、いずれも爽やかさや明朗さがセールスポイントの、新しいタイプの団体ばかりである。

〈祭りの再活性化〉

昭和三〇年代の後半から四〇年代にかけての厳しい時期を、「お膝元」の団体や「新しいタイプ」のグループによって、かろうじてしのいだボシタ祭りは、その後は一転して奉納数を急激に伸ばしてゆく。

昭和四九年の飾馬は一二頭である。前年の六団体から倍増している。四九年は、いわゆるオイルショックの翌年で

ある。この困難なはずの年に、実数では大きな数でないにしても、倍増したのは興味深い。

四八年の奉納団体の構成と比較してみると、本荘町子供会が退き慶徳校子供会が入っている。いったん奉納を取り止めていた青年会議所と建吉組の二団体が戻り、熊本信用金庫、岩田屋伊勢丹、木原産業、灰塚町センターフジの四団体が新規に加わっている。木原産業と灰塚町センターフジをのぞけば、前年から継続している団体も含め、すべて新しいタイプの団体である。木原産業だけが個人経営的な食品加工業者であって旧来のタイプに入る。灰塚町センターフジについては不明である。

公共団体や企業団体の祭り参加は、祭りの底支えと復興のきっかけになった点で重要な位置を占めるが、それを引き継いで戦後第二期のピークにまで押し上げるのは、高校同窓団体といわゆる「祭り愛好団体」である。

昭和五〇年の飾馬奉納団体の特徴は、济々髷高校の同窓団体（済商会：济々髷高校出身の商業関係者グループ）と熊本高校のそれ（青年江原会：熊本高校の同窓会である「江原会」の若手グループ）の参加である。济々髷高校と熊本高校は熊本県を代表する名門校で、何ごとについても古くからのライバル校である。その二校が高校同窓団体としては初めて、また同時に参加したことは、当時かなり話題になった。

济々髷高校同窓会（五〇年は済商会として出場、五五年から同校同窓会で正式に認められて济々髷高校同窓会となった）も青年江原会も、「さびれてしまったボシタ祭りをこのへんでもう一度盛り上げよう」と飾馬を出したという。先陣を切った熊本高校には、同窓会関係者からは「おまえら何ばとばけとるのか!」と非常識よばわりされることが多かったという（『青年江原会報』、一九八二）。しかし、二つの有力校の参加の後は、市内の各高校の同窓団体が連鎖反応的に競って参加する。現在では、女子高と新設校を除くと、市内のはぼすすべての高校の同窓団体（必ずしも正式の同窓会ではない）が飾馬を奉納することになる。同窓会グループは、「高校OBボシタ祭り連合会」（女子高一校も含まれる）を結成するなど、今やボシタ祭りの一大勢力となっている。

昭和五四年の飾馬は二八頭。団体数としては漸増状態であるが、参加者数はかなり増加している。すでに五一年あたりから、高校同窓団体を中心に一団体で五〇〇人、六五〇人と報じられているところがある。（S・51・9・3・朝、など）昭和五〇年代の半ばからは、出場団体の急増に一団体あたりの人員の増加が重なり、全体の参加者数は過去に例のない急激な伸びを示す。五四年（二八団体）に一万二千人だったものが、二年後の五六年（四四団体）には約二倍の二万三千人にまで増大している。（S・56・9・16・朝）

表 1 飾馬奉納団体の変遷 1

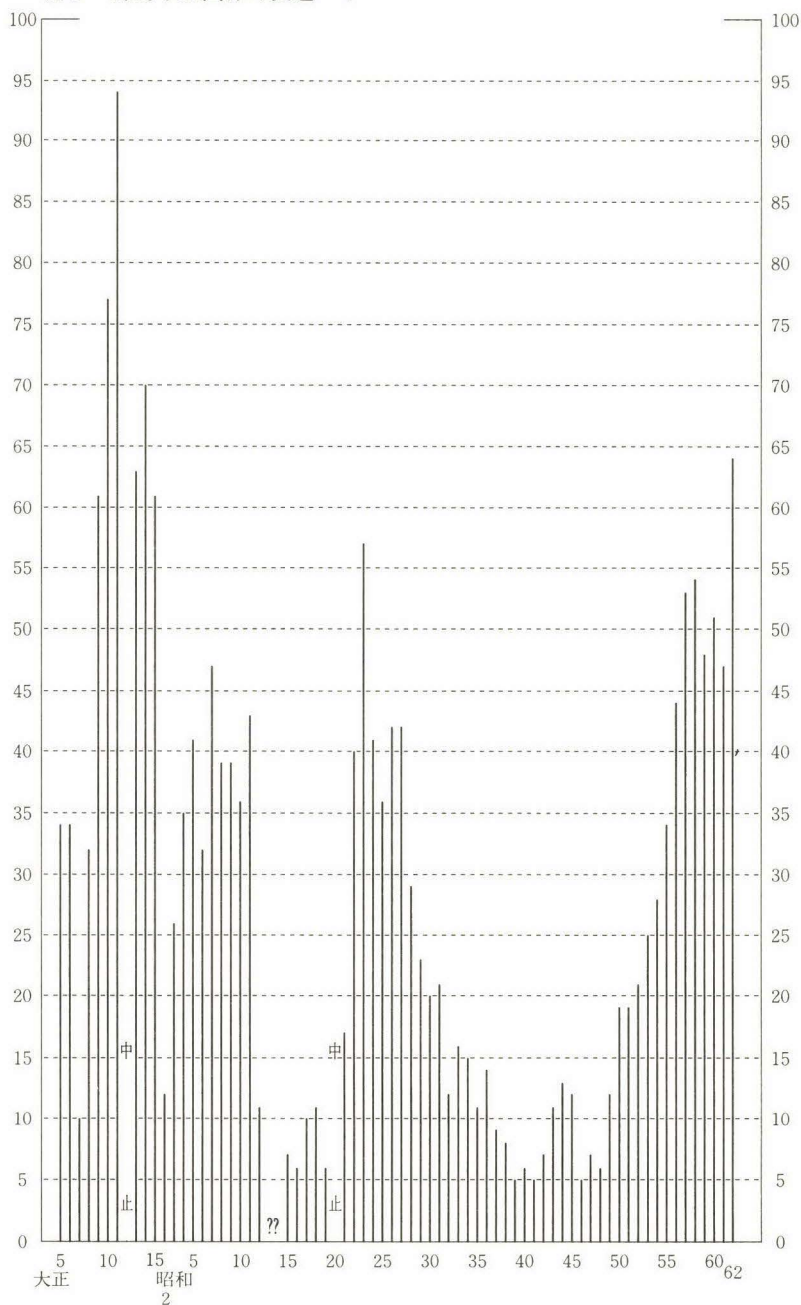


表2 飾馬奉納団体の変遷 2 (昭和37年から60年まで)

年	地 域	伝統型企业	近代型企业	高校同窓会	祭り愛好会	各種団体	合 計
37	4	5	0	0	0	0	9
38	5(+3, -2)	2(+1, -4)	0	0	0	1(+1)	8(+5, -6)
39	3(+1, -3)	2	0	0	0	0(-1)	5(+1, -4)
40	4(+2, -1)	* 2(+1, -1)	0	0	0	0	6(+3, -2)
41	3(-1)	* 2(+1, -1)	0	0	0	0	5(+1, -2)
42	5(+3, -1)	* 2(+1, -1)	0	0	0	0	7(+4, -2)
43	5(+3, -3)	* 5(+3)	0 鶴(ミコシ)	0	0	1(+1)市	11(+7, -3)
44	7(+3, -1)	* 4(+1, -2)	1(+1)産	0	0	1	13(+5, -3)
45	5(+1, -3)	4(+1, -1)	2(+1)	0	0	1	12(+3, -4)
46	3(+1, -3)	0(-4)	2	0	0	0(-1)	5(+1, -8)
47	3	0	2	0	0	1(+1)青	6(+1)
48	4(+1)	0	2	0	0	0(-1)	6(+1, -1)
49	4(+1, -1)	2(+2)	4(+2)	0	0	2(+2)	12(+7, -1)
50	5(+1)	4(+2)	4(+1, -1)	2(+2) 江済	0	3(+2, -1)	18(+8, -2)
51	6(+1)	4	3(-1)	4(+2)	1(+1)愛	1(-2)	19(+4, -3)
52	5(+1, -2)	4	4(+2, -1)	4	2(+1)	2(+1)	21(+5, -3)
53	5(+1, -1)	5(+1)	4	7(+3)	2	2	25(+5, -1)
54	6(+1)	5	4	9(+2)	2	2	28(+3)
55	7(+1)	5(+1, -1)	4(+1, -1)	13(+4)	3(+1)	2	34(+8, -2)
56	8(+1)	5(+1, -1)	6(+2)	14(+1)	7(+4)	3(+1)	43(+10, -1)
57	9(+1)	8(+3)	5(+1, -2)	14	12(+6, -1)	5(+2)	53(+13, -3)
58	9	8	4(-1)	14	14(+3, -1)	5	54(+3, -2)
59	9	6(-2)	4	11(-3)	13(-1)	5	48(-6)
60	9	7(+1)	3(-1)	15(+4)	13(+1, -1)	4(-1)	51(+6, -3)

【註】 () 中の数字は増減の内訳を示す。例えば60年の合計……51(+6, -3)というのは、59年の48団体から3団体が奉納を取り止め、新規あるいは復活で6団体が加わって、差引き3団体の増加になったという意味である。

〔伝統型企业の欄〕

40年 * 2(+1, -1)……+1は建吉組の初参加。

41年 * 2(+1, -1)……+1は建吉組がふたつに分れたため、参加2の内訳は建吉組(第一)と建吉組(第二)。

42年 * 2(+1, -1)……-1は建吉組がひとつになったため。参加2の内訳は建吉組と松村組。

43年 * 5(+3)……+3は再びふたつに分れた建吉組と重浦組、北山組。

44年 * 4(+1, -2)……-2は建吉組がふたつ抜けたため。

〔近代型企业の欄〕

43年 0 鶴(ミコシ)……鶴屋が“みこし”を出す。

44年 1(+1)産……九州産交が初参加する。

〔高校同窓会の欄〕

50年 2(+2)江済……江原会(熊本高校)と済商会(済々黉高校)が初参加する。

〔祭り愛好会の欄〕

51年 1(+1)愛……藤崎宮大祭愛好会が初参加する。

〔各種団体の欄〕

43年 1(+1)市……市役所職員有志が初参加する

47年 1(+1)青……青年会議所が初参加する。

新規参加団体の伸びが大きい昭和五五年から五七年までについてその内訳を見てみると、祭り愛好団体が多いことがわかる。祭り愛好団体というのは、特定の母体となる集団をもたず、ボシタ祭りに参加すること自体を集団形成の主たる契機としている団体である。昭和五十一年、ずばり「藤崎宮大祭愛好会」と銘打った団体が登場するのが最初である。五〇年代になって新規に参入してくる団体は、近代型企業団体、高校同窓団体以外は、地域名や個人企業名を名のっている場合でも、そのほとんどすべてが祭り愛好団体と考えて差支えない。

〈規制下の祭り〉

昭和五七年には「藤崎八幡宮大祭飾馬審査委員会」なるものが発足し、祭りの規制を打ちだしている。二三・二四年にも同様の規制が試みられたが、実効はなかったようだ。四六年には暴力団の参加とのからみで、奉納団体指名制を採用してかなりの成果をあげている。

五七年の規制は、規則を明文化した冊子を発行するとともに、警察とも緊密な連絡をとり、いっそう組織的、全面的かつ強力な規制を始めたものである。規則は、とかく一般市民から批判のあった暴力団員の参加、寄付の強要、馬の虐待についての規制を強化するとともに、馬の飾り、掛け声、勢子の服装、その他について細かく規定している。

また、審査委員会は、供奉の人数の膨張が円滑な神幸に支障をきたしているとして、規則で一団体あたりの勢子数を制限したほか、新規団体の参入にも厳しい条件でのぞむようになった。

昭和五八年には、「飾馬奉納規則」に違反したとして四団体が翌年の奉納辞退を勧告された。実質的には、奉納規則による初めての出場停止処分である。五九年は新規の奉納が受け入れられず、四団体に対する実質上の参加停止処分と二団体の参加辞退で計六団体が奉納を取り止めたため、飾馬の奉納は四八団体となった。一一年ぶりに前年よりも減少したわけである。しかし、この年の減少は市民の祭りへの参加意欲の実勢を反映していない。奉納停止処分の団体は別にしても、新規の希望団体すべてに奉納を認めれば、六〇団体は超えたはずである。六二年には、藤崎宮は神幸式の正常化の成果があがったとして、ひさびさに多数の新規奉納を受け入れた。その結果は六四頭と戦後最多を記録し、それでも奉納を認められなかった団体がまだいくつか残っているというありさまである。

三 祭りと社会変動

〈戦前の祭りと経済変動〉

大正期から昭和の初期にかけての飾馬奉納の変化の跡も、

かなりはつきりとたどることができる。ただし、明治期の奉納頭数については不詳である。当時の新聞記事から断片的に読み取れた範囲では、最も少ない年（明治二八年）で四頭、最も多い年（明治二四年）で四三頭である。

大正五年と六年は、ともに三四頭とかなりの奉納があったが、七年には一〇頭に落ち込んでいる。しかし、はやくもその翌年に三二頭と元に戻ってからは、九年が六一頭、一〇年が八〇頭、一年が九四頭と、毎年最多記録を更新する。一二年は、例祭をまじかにひかえて発生した関東大震災を理由に神幸式が中止されたが、八月末現在で七〇頭の奉納が予定されていた。その後四年間は、六〇頭から七〇頭とかなり多数で安定している。

ところが昭和二年は、一挙に一二頭にまで激減した。しかし、翌年にはすぐに反転して、五年には四〇頭台にまで回復し、一年まではおおむね四〇頭前後で推移している。四〇頭というのは、大正期後半の六〇―七〇頭にくらべると少ないが、明治期の最多頭数に匹敵する。しかし、一二年には一一頭とまたもや急落し、終戦まで低迷が続く。

大正期から昭和初期にかけての飾馬の奉納頭数の変化を追跡してみると、その増減がマクロな社会変動と密接に関連していることがうかがえる。

そのうちのひとつが、経済変動との関連である。大正期以降の飾馬の奉納頭数の変動の端緒になったのは大正七年

である。この年の七月に富山県で発生した米騒動は、八月初めから半ばにかけて全国に波及した。熊本では騒動は起こらなかったものの、米騒動の背景にある経済状態と当時の世相を共有していたはずである。そして、この年の飾馬の奉納がいったん大幅に減少した後、翌年からはかつて例をみないほど急激な増加を示す。この間、つかのまの戦後ブームの後に戦後恐慌を経験している。その後は、昭和二年の一過性の激減をはさみながらも、全般的には漸減を続ける。

昭和二年はいわゆる金融恐慌の年である。この年にいったんは激減するが、翌年からはふたたび増加に転じ、昭和恐慌の年の五年から昭和一二年の急落までの数年間は、四〇頭前後とかなり高い水準を維持する。

全国的な規模で人々がモノやカネに殺到するような経済パニック（米騒動や取り付け騒ぎ）があった年は、熊本ではそうした騒ぎがなくとも、飾馬の奉納は例年に比べてかなりの減少を示す。しかし、翌年にはすぐに盛り返し、以後それに引き続く不況の中で、跳ね上がるように増加する傾向がある。

〈戦後の祭りと経済変動〉

戦後の動向は、不況だけでなく好況も含めた一般的な経済変動との関連で、飾馬の奉納傾向を検討するのに好都合

な材料を提供してくれている。

すでに述べたように、昭和三〇年代から四〇年代にかけて低迷状況にあったボシタ祭りは、四九年からは一転して飾馬の奉納を増加させてゆく。その前年のオイルショックは、米騒動や金融恐慌の取り付け騒ぎと同様に、全国的な買い占め騒ぎを引き起こした。しかしこの年は、前二者のときとは違って、飾馬の急激な減少は起きていない。これは、オイルショックがその年の祭りの二カ月後のことであり、また当時は飾馬もすでに底をつくほど減少していたとさなので、必ずしも同一に論じられない。

それとはかく、戦後初のマイナス成長を記録して高度成長にはっきりと別れを告げた昭和四九年を皮切りに、その後は、低成長もしくは安定成長のもとで飾馬の増加が続き、五〇年代の末には戦後第二次のピークに達する。戦前の経済の不況と祭りの盛況との相関に類似した現象を呈するのである。

ところで、戦後のデータは、単に経済の不況と祭りの盛況との相関を再確認させるだけでなく、逆に経済の好況と祭りの低迷との関連をもはっきりと示している。

昭和二八年に飾馬の奉納頭数が前年の四二頭から二九頭へと大幅に落ち込むのは、おそらくその年の「六・二六水害」の影響である。もともと、それに先立つ特需ブームの二五年には、すでに衰退化の兆候が現われている。ともか

く、この大被害がその後の熊本経済の沈滞を招いておれば、戦前の例のようにふたたび飾馬の急増をもたらした可能性がある。しかし、事態は逆で、水害は多額の復旧事業を惹起し、この局地的な土木建築ブームがそのまま昭和三〇年代からの全国的な高度成長へとつながっていく。

大型で長期にわたった未曾有の高度経済成長とはうらはらに、ボシタ祭りの飾馬奉納は減少の一面をたどる。東京オリンピックの年の昭和三九年には、ついに戦後最少の五頭を記録する。その後は、おおむね低迷を続け、次の決定的な転換には、前ほどのオイルショックをまたなければならなかった。

高度成長期における祭りの不振はボシタ祭りに限られるものではなく、全国的に多くの祭りが衰退していったようである。（S・45・2・22・朝記者手帳）ボシタ祭りの飾馬奉納頭数の減少は、この全国的な傾向を、単なる印象ではなくはっきりとした数字で教えてくれている。

〈戦前の祭りと戦争〉

戦後の飾馬の急激な減少は高度成長期に顕著に見られたが、過去にもこうした甚だしい低迷が観察されるときがある。それは戦時である。昭和一二年には前年の四三頭であった飾馬の奉納が一一頭へと激減する。そして、一五年から終戦までは六頭から一一頭と低迷状況が続くのである。

(一三・一四年は不明である)

戦時における藤崎宮例祭(現在の通称・ボシタ祭り)の沈滞ぶりは、日清・日露の戦のように、短期間でしかも戦勝に終わった場合も例外ではない。明治二四年には四三頭も奉納があった飾馬は、その後急激に減少し、二七年の日清戦争開戦直後の祭りでは七頭ないしは八頭、日本の戦勝に終わった翌二八年にはわずかに四頭にすぎない。

日露戦争に際しては、明治三八年は不明であるが、三七年には一六頭が奉納されている。この数字を見るかぎり必ずしも不振であったとはいえない。それでもその前年の二二頭からは減少している。三九年に地元新聞に寄せられた投書(九日 M・39・9・5)は、「古き昔より藤崎宮の祭典は熊本の誇りであつた。然るに此両三年の祭典は何んだ。誇りも何もあつた者にあらず。是れも戦争と云ふ大難物があつたからであらう」と憤慨し、「市民は宜しく奮発して賑合ひを為すべし」と訴えている。

そして、昭和一二年の飾馬の激減である。この年の七月七日には蘆溝橋事件が勃発している。ただちに熊本の第六師団にも応急動員令が発令され、同師団は中国大陆に向けて出動した。その後、大陸の戦線が全面戦争化しつつ膠着・長期化するとともに、飾馬の奉納も停滞する。この低迷は、太平洋戦争をはさみ敗戦まで続くのである。

戦争は戦時公債や相次ぐ寄付金募集などで家計を圧迫す

る。祭りの実働グループの中核を占める青年層の出征は、祭りを弱体化させるであろう。藤崎宮の祭りに関していえば、馬匹徴発による馬の減少も痛手である。

しかし、これらのことだけで、それほどにも祭りを逼塞させる理由になるとは思えない。戦争は、むしろ神社や祭りが公的にクローズアップされる好機でもある。戦時下にあつて国家護持を標榜し、皇軍全勝・敵国降伏の祈禱祭を行なう神社は、国民の敵愾心をあおり、士気を鼓舞するのに絶好の役目を果たす。

藤崎宮の場合は、祭神の一柱である神功皇后の「三韓征伐」や、随兵行列の起源と結びつけられている加藤清正の「朝鮮征伐」の故事が語られ、その神威が強調される。

興味深いのは、「ボシタ」という掛け声についての意味づけである。「ボシタ」とは加藤清正が朝鮮を「滅ボシタ」という意味、とする語源論ないしは解釈がまことしやかに説かれる。日清戦争の数年前、当時五高の教授であつたラフカディオ・ハーンは、「朝鮮亡シタリ。エエコロ亡シタリ。亡シタリ。亡シタリ。亡シタリ」という掛け声を聞いたと書簡に記している。(『ラフカディオ・ハーン著作集 第十四巻』、二七一頁)

「ボシタ」は単なる掛け声にすぎない。ところが戦時には、戦争に適合的な意味が付与され、過去(加藤清正の朝鮮出兵)と現在(清・露・中・米との交戦状態)とが結び

つけられる。ほとんど信憑性のない縁由譚が強い暗喩性を帯びてくる。そして、昭和三年には、随兵頭を務めた在郷軍人会長・井上第五郎が「ボシタは『敵国を攻滅ぼす』意識」と強制するまでになるのである。(九日 S・3・9・14)

このような時期には、神社と祭りはまさに時宜にかなったものであり、祭りが人々を吸引する力が強くなってもおかしくはない。それにもかかわらず、藤崎宮の例祭は賑わっていない。皮肉なことに、活気が戻るのは、「凱戦」ではなく「敗戦」を契機にして、つまり「滅ボシタ」ではなく「滅ぼされた」ことによってであった。

〈祭りと戦争・考〉

ボシタ祭りと経済変動、ボシタ祭りと戦争との間には、密接な関係があるようである。このうち祭りと戦争との関連については、すでにカイヨワなどの指摘がある。

カイヨワによれば、祭りと戦争とは、いずれも日常性の否定である。それは騒乱と動揺であり、破壊と蕩尽である。個人はその独立性を否定され、集団的な熱狂に呑みこまれる。明治末年の新聞(九州 M・43・9・16)が拾っている「イサギユウ、オソロシウシテ、オモシロカ」(とても恐ろしくて、なおかつ面白い)という感想は、女性の見物人のものであるが、カイヨワの祭り―戦争論にあまりにも適合的でおかしいくらいである。

カイヨワの「過剰エネルギー放出論」を、祭りの一般理論としてそのまま認めるわけにはいかない。しかし、かつてのボシタ祭りには、彼が指摘する暴力や習俗の紊乱などの特徴がかなり明瞭に現われている。それは、勢子の乱暴狼籍、飾馬の虐待、卑猥な服装・所作・掛け声などのなかに、はつきりと読み取ることができる。

カイヨワの所論にしたがうならば、近代においては、戦争こそが、もつとも巨大でもつとも強力な共同体である国家の祭りということになる。「イサギユウ、オソロシウシテ、オモシロカ」ボシタ祭りも、戦争という壮大な祭りの恐怖と魅惑を前にしては、問題にならない。

大本営発表の相次ぐ「戦勝」報道に日本中が湧き立っている巨大な非日常性のなかでは、祭りの非日常性も日常性の単なるひとこまではないであろう。戦争という壮大な国家の祭典を前にしては、一地方都市の祭礼などは、とるに足らないものとして低迷せざるをえないようである。事態が重大化していくにつれ、新聞紙面は戦争一色に塗りつぶされて、当時の例祭の様子を知る手がかりはほとんど見あたらなくなる。

〈祭りと経済・考〉

それでは、経済変動と祭りの関係については、どう考えるべきであろうか。これについては、経済変動と飾馬の奉

納頭数との間に、見事なほどの相関を見せる戦後の例に即して考えてみるのが、適当である。

山崎正和（『柔らかな個人主義の誕生』、『一一二五頁』）によれば、日本の一九六〇年代は、経済成長や国際化など、国家が明瞭な主題をもち、国家が主役を演じていた時代である。いいかえれば、国家が「大きな目的をめざして動く戦闘集団」として、「国民にとって面白い存在」であった時代である。かれは、東京オリンピックと日本万国博覧会が、経済的な繁栄をことほぎ、「世界のなかの日本」を確認する「祝祭」・「祭典」であったという。

軍事でも政治でも文化でもなく、「経済」を主題とした国家（「日本株式会社」）の兵士（「企業戦士」）たちは、「大きな目的をめざして動く戦闘集団」の尖兵として奮闘した。その結果、戦後の日本人が「世界のなかの日本」を自覚するに至る東京オリンピックの昭和三十三年に、飾り馬奉納数が戦後最低となったのは暗示的である。

デュルケムもカイヨワも経済と祝祭とは対極に位置するものと考えていたようである。けれども、「世界のなかの日本」を目指した高度成長期にあっては、経済活動そのものがかつての戦争に匹敵する「祝祭」であったともいえる。

「経済成長は麻薬だった」という高橋正雄の述懐（エコノミスト編集部編『証言・高度成長期の日本（上）』）も、マルクスのひそみにならったものか、「経済」がある種の宗教性

を帯びていたことを示唆している。オリンピックと「バンク」は、高度経済成長という巨大な祝祭の二大祭典を構成している。それだけではない。日常生活における活発な消費活動とレジャーブームは、私生活でもまた、雑多な「神器」に囲まれて、小さな祭事にかまけていたことを意味する。

これほど「おもしろい」祝祭と祭典と祭事を前にしては、またもや地域の祭りが低迷してゆかざるをえなかったのも当然であろう。

そして、オイルショック。これをきっかけに、日本は大きな方向転換を余儀なくされる。山崎の言葉を借りれば、「国家のイメージ〔は〕縮小」し、「国家は祝祭の場所ではなくなつたのである。これは、「経済」が国民に共通の祝祭ではなくなったことに対応しているよう。そして、全国的に地域の祭りが復活する。オイルショック以後のボシタ祭りのめざましい復興は、これまた全国的な動きを凝縮して体現している。これも山崎が指摘するとおり、おりしも「地域の時代」が喧伝されていたのは、「示唆深い」ことであつた。

そういえば、敗戦直後の一時的な飾馬の急増も、つかのまの「国家のイメージの縮小」によって、地域や地方の位置が相対的に上昇したことに対応するのであろうか。

〈祭りを支える「縁」〉

さて、ボシタ祭りと社会変動ということについては、もう一つ重要な論点が残されている。というのは、マクロな社会変動を背景にして飾馬の奉納頭数や勢子の数が増減するというだけでなく、飾馬の増加にあたっては、その奉納者（団体）の性格にも変化が見られるからである。

大正初期における飾馬奉納者の社会的属性については不詳であるが、地域的な特徴はかなりはっきりしている。飾馬の奉納資格についての特別な制限はなく、実際の奉納者も氏子や氏子地区に限定されていない。しかし、おのずから、氏子区域を中心とした熊本市内からと、かつて杜殿が藤崎台にあったころの縁故の地である市外西北部地域からの奉納が多数を占めている。

これに反して、米騒動以後は南部からの奉納が盛んになる。「表3」は、市内と市外西北部地域からの奉納に対して、それ以外の地区が増えていく様子を示している。ここで「市内」というのは、明治二二年の熊本市制発足当時の市域であり、北部・西北部・東部・南部というのは、市内に隣接する町村について私たちが設定した大雑把な地域割である。

一瞥してわかるように、米騒動以後は南部地域の増加が著しい。やがては南部だけで過半を制するようにさえる。この地域は、詳述するいとまはないが、当時すでにかなり

表3 飾馬の奉納地区

年	総数	市内	西北部	北部	南部	東部	その他	年	総数	市内	西北部	北部	南部	東部	その他
大正6	35	26	8	0	1	0	0	昭和4	27	6	5	0	15	0	1
大正7	10	7	1	1	1	0	0	昭和5	41	12	10	1	17	0	1
大正8	31	20	9	1	1	0	0	昭和6	19	2	6	0	11	0	0
大正9	56	34	15	1	5	1	0	昭和7	45	16	8	0	20	0	1
大正10	79	47	15	3	10	4	0	昭和8	38	10	8	1	17	1	1
大正11	90	50	20	2	15	3	0	昭和9	14	5	2	0	5	1	1
大正12	68	38	9	3	15	3	0	昭和10	36	7	7	1	19	1	1
大正13	64	29	12	3	17	3	0	昭和11	43	10	10	1	20	1	1
大正14	70	31	10	2	23	4	0	昭和12	11	3	2	1	3	1	1
大正15	58	19	10	1	27	1	0	昭和13	11	3	0	0	6	2	0
昭和2	12	7	1	0	2	1	1	昭和15	7	3	1	0	3	0	0
昭和3	25	9	4	0	11	0	1								

※この表での総数が表1の奉納数と異なるのは、奉納団体の地域が判明なものに限ったからである。

※大正12年（神幸式中止）は8月末現在の奉納予定数である。

の程度熊本市圏に組み込まれていたところである。ということは、大正期の飾馬奉納の急増のかなりの部分が、市圏の拡大にともなう新しい都市民層によって担われていたことがわかる。周辺町村の合併による熊本市の最初の市域拡大が、大正一〇年であったのも興味深い。この祭りは、すぐれて都市の祭りであって、近接していても農村部から飾馬が奉納されることは、ほとんどない。もともと市圏は南部だけでなく、他の方面にも広がっている。南部地域からの奉納が特に増加する理由は、今のところ不詳である。

ただし、従来あまり例のない地域からの奉納には、ある種の抵抗があったようである。大正一〇年前後の熊本を描いた地元作家（森本忠「春日の若者」、一〇三頁）の小説に、南部地域にある北岡神社（祇園社）の氏子地区から藤崎宮に飾馬を奉納する場面がある。飾馬を奉納すると聞かされた地区民は、「祇園さんのお膝下かる藤崎さんのお祭りい出すたあ、をかしかぞう」と驚いている。

小説のなかだけでなく、おそらく実際の奉納にも常識の抵抗があったであろう。いくつかの団体が先陣をきると、それをまっていたかのように、似たようなグループが一同となつて後に続く。こうした動きには、単に形態学的な地域圏の拡大だけでなく、「地域意識」の拡大の様子がシンボリックに現われている。他の神社の氏子でありながら熊本市中心部を氏子地区にもつ藤崎宮の祭りに参加することで、昔ながらの

狭い地域社会から心理的にも解放され、熊本市民、あるいは市圏民としてのアイデンティティを求めているようである。

オイルショック後に急増する高校同窓団体は、米騒動後の南部地域と同じく、それまでは飾馬の奉納など思いもよらなかった団体ということになる。むろん、祭礼組織上、あるいは金銭的に困難だということではない。祭りに参加することを非常識と考える、常識による暗黙の制約である。青年江原会（熊本高校同窓団体）が飾馬奉納を決めたとき、先輩OBたちから受けた「おまえら何ばとぼけとるのかー」という叱声は、「祇園さんのお膝下かる藤崎さんのお祭りい出すたあ、をかしかぞう」という驚きと、同じ常識の反応である。

祭り愛好団体というのも同様であろう。それまでの飾馬奉納団体は、いずれも母体となるフォーマルあるいはインフォーマルな集団をもっていた。ところがこのグループは、ボシタ祭りに参加すること自体を契機に形成されている。母体がないだけに、仲間からの反発はない。しかし、このグループは藤崎宮や審査委員会からある種のうさん臭さをもって見られることが多いようである。

いずれにしても、これらの「非常識」の結果として、ボシタ祭りは隆盛を取り戻した。新しい時代にふさわしい「縁」で結ばれた集団の新規参入と新陳代謝があつて、はじめて、この「都市の祭り」は再活性化するのである。

もつとも、「表2」を見る限り、今日でも地域系の団体は多いし、わずかながらも増加している。しかし、これは、地域名をつけた団体は便宜的にこちらに分類したためで、実態となればその多くは愛好会系団体である。伝統型の個人企業の団体にしても同様である。しかし、他方では地域意識や地縁が無意味になったともいえない。ボシタ祭りに出てくる人たちは、しばしば「ボシタがあるけん熊本たい」という。熊本の祭りという意識は、かなり強いのである。

四 結語に代えて

昭和三〇年代から四〇年代にかけてボシタ祭りが低迷していたとき、その理由として指摘されていたのは、地域のつながりの希薄化、信仰心の衰退、奉納経費の高騰、農耕・使役馬の減少、暴力団の参入といったものであった。そのなかでも、地域のつながりの希薄化と信仰心の衰退は、当時は全国的に見られた祭りの衰退の要因として各地で語られていたことであろう。

しかし、私たちは、戦前戦後を通じてのボシタ祭りの消長を、そうした要因に依拠することなく説明できる。要するに、時代そのものが祝祭性を帯びているときにはボシタ祭りは衰退し、逆もまた真であるということである。さらにその理由はとなれば、赤塚行雄（『祝祭経済の時代』、一六

頁）がハーヴィ・コックスを引き合いに出して言っているように、そもそも人は「お祭り人間」（*homo festivus*）からだ、という以外には今のところ方法はない。ともかく、戦争という「お祭り」のときも、高度成長という「お祭り」のときも、ボシタ祭りは衰退せざるをえなかった。ということは、ボシタ祭りをはじめ多種多様なお祭りが盛んになっている現在の日本の状況は、逆に祝祭性が希薄なことを、いいかえれば表面的な「おもしろ」ブームにもかかわらず、本質的に「退屈な」時代であることを物語っているのではなからうか。

安定成長のもとでの「国家のイメージの縮小」と「モノばなれ」傾向のなかで、地域の伝統的な祭りの復興や、官・財・民がそれぞれに主導する新しいお祭りやイベントの創造が盛んである。しかし、私たちは、大正の末期から昭和の初めにかけてのボシタ祭り（現在の通称）でも、多数の飾馬が奉納されていたことを知っている。この時代は、全般的には恐慌と不況の時期であって、国家はますます大きくなり、そして戦争へと突入する前夜である。地方や地域が生き生きとしていた時代というより、日本中に暗い不安が忍びよっていたときである。

現在の「祭りの時代」が真に「地域の時代」や「心の時代」に対応したものなのか、それとも、主観的なイメージの縮小とはうらはらに、客観的にはますます大きくなって

いく国家の陰で、ぼんやりとした不安・不満・退屈・迷い、一言でいえば閉塞状況とでもいうべきものが人々の間に広がっていることを暗示しているのか、にわかには判断しがたい。今のところ、こうした観点から祭りが注目されることはあまりないようだし、一地方都市の事例だけであつたこともいえないが、このあたりも今後の祭り研究の一つの課題になるべきものであろう。

最後に、時代そのものの本質的な「非祝祭性」が祭り一般にとつては好都合であるにしても、それだけでは、必ずしも個々の具体的な祭りの盛況を保証するものではない、ということも再確認しておきたい。高度成長期において祭りの低迷の原因として指摘されていた課題がそれなりに解決されなかったならば、ボシタ祭りの再興がむずかしかったことも確かであろう。おそらく、いったん衰微した後、二度と復興できなかった祭りも多いはずである。

ボシタ祭りの再活性化にあたって力があつたのは、旧来の個人団体や地域団体の退場と入れ替わりに参入してきた高校同窓会系や祭り愛好会系の団体であった。このことは、マクロな時代性を背景にしながらも、ボシタ祭りには、その新しい時代にふさわしい新陳代謝があつたことを示している。この時代の祭りにマッチした高校同窓会系や祭り愛好会系の団体を結びつけている「縁」とは何なのか。また、多様な「縁」のネットワークで構成されている地域社会と

は何なのか。こうしたボシタ祭りとその内部環境としての共同体との関係をめぐる問題の検討は、また別の機会にゆずりたい。

(1) (熊日 S・62・11・26 斜断記) とは、熊本日日新聞の昭和

六二年一月二十六日づけ夕刊のコラム「斜断記」の記事、という意味である。以下新聞を参考にした場合はこの書式に準じる。九州新聞は九州、九州日日新聞は九日と略した。なお、この後は熊本日日新聞については紙名を省略する。特集記事などでタイトルがついている場合は、そのタイトルも記している。また、M・は明治、T・は大正のことである。日付の後に朝とあれば、朝刊のことである。記事名のないのは、一般の報道記事ならびに名のついていないコラムの記事である。

(2)

本稿は、私が熊本大学の学生とともに、昭和五九年から六一年にかけて実施した「ボシタ祭り」調査の成果のごく一部である。調査にご協力頂いた藤崎宮を始め、関係の皆様にはお礼申し上げます。この調査には多数の学生が参加したが、本稿をまとめるにあたっては、特に池田新一郎(文学部)、高木章雄(法学部)の両君の助力を得た。記して感謝する。

(3)

戦前戦後をとおしての飾馬奉納団体数の推移については「表1」を、戦後の衰退期から今日の隆盛期までについては、「表2」を、戦後の衰退期から今日の隆盛期までについては、「表2」も参照して頂きたい。なお、飾馬の奉納頭数については、昭和二二年から六二年までは、藤崎宮から提供を受けた団体名簿によつた。戦前については、地元の新聞記事によつてゐる。ボシタ祭りについては、既存の研究は皆無に等しく、また藤崎宮にも戦火や水害

のためか利用できる資料がほとんどない。そのため、新聞記事が立論の最大の根拠になっている。利用した記事はきわめて多量で、いちいち典拠を示すことは煩瑣なので、特に必要があるかと判断した場合をのぞき、省略した。

- (4) 祭りや戦争、祭りと高度成長については芦田徹郎「攻撃性と聖戦のあいだ」も参照していただきたい。

【参考文献】

赤塚行雄『祝祭経済の時代』、河出書房新社、一九八五。

芦田徹郎「攻撃性と聖戦のあいだ」(『熊本大学教養部紀要 人文・社会科学編 第二〇号』、一九八五)。

上野千鶴子「祭りと共同体」(井上俊編『地域文化の社会学』、有斐閣、一九八四)。

高橋正雄(談)「経済成長は麻薬だった」(エコノミスト編集部編『証言・高度成長期の日本(上)』、毎日新聞社、一九八四)。

カイヨワ(秋枝茂夫訳)『戦争論』、法政大学出版局、一九七四。

佐和隆光「高度成長」、日本放送出版協会、一九八四。

田村紀雄「祭りの社会学」(同編『祭りの天気図』、幸洋出版、一九八一)。

松平誠『祭りの文化』、有斐閣、一九八三。

森本忠「春日の若者」(『日本談義』昭和三十七年八月号、日本談義社、一九六二)。

山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』、中央公論社、一九八四。

米山俊直『都市の祭りと人類学』、河出書房新社、一九八六。

『ラフカディオ・ハーン著作集 第一四巻』、恒文社、一九八三。

(熊本大学教養部助教授)